



天 野 宏

私の居た所は、ブラッセルから西の方約六〇キロにある昔のフランドル伯爵の古都ゲントで、ここより更に西に五〇キロ程行くとオステンドがあり、ここから英国に行く船が出ています。さて、ゲントの生活ですが、最初はプロフェサーフォトレイがさがしておいてくれた高校の物理の先生の下宿しましたが、余り面白くないので、少したってから友人にさがしてもらってセイロン人の家にかわりました。そのセイロン人は混血で、まだ未婚の五十才くらいの肥えた人です。この下宿には私以外に二人のゲント大学の学生が下宿していました。一人はジョンといって、医学

部の六年生で六二年に卒業する学生です。彼のお父さんはアルメニア人で現在はデン・ハークに住んでいる経済学者だそうで、戦後永い間インドネシアの経済顧問をして彼地に住んでいたそうです。宗教はギリシヤ・オルトドックスだと言っていました。どうもアルメニア教会のようでした。お母さんはオランダ人で、時々息子の勉強を見にきました。また他の一人はフランスアといって、家はアントワープにあり、理学部物理学科の一年生でした。この人達以外にマルクという経済学部の大学院の学生が毎日夕食を喰べに来ます。彼は真面目な青年で、毎食事の時に十字架をきる熱心なローマン・カソリックの信者です。従って、夕食の時は、ジョン、フランスア、マルク、マダム・アソラバと私の五人です。ここで私は色々と彼等と話をし、ヨーロッパの物の考え方を知ったのです。その中で、特に興味のあるのはヨーロッパ人の嫉の問題でした。

ある時、フランスアがアントワープに帰った時、ジョンが言いだしたのです。近頃の学生は―それは明らかにフランスアを指しています―ジャズを歌ったり踊ったりして、礼

儀作法は乱れ、人殺しまでするようになったということ。ジョンの思想は、ナチズムは正しい、あれこそ国民を正しい生活に導くものだ。デモクラシーは馬鹿のやることで、何時までたっても議論ばかりをして、結論が出ない。たまたま結論が出て、それは正義から程遠い妥協の産物であるというのです。それは私の考える所では、彼がヨーロッパに住んでいるアルメニア人、すなわち亡国の民であるということに原因しているのか、あるいは母親のオランダ人の血をとおしてドイツに親近感を持つているのか、そのどちらかによるのでしょうか。ちょうど、その時にマルクもいて、ジョンの言葉に賛成して、ゲントの町にもだんだんとジャズのカフェができてきた。そこでは学生がロックン・ロールを踊っているのが慨嘆した。ジョンは日本でも古い伝統があり、それはこの戦争の後どう変わったか、また貴方はヨーロッパに来てどう感じたか、と聞き出した。私は何んと答えてよいのか、全く迷ってしまった。それは、明らかに私の気持ちさえ、彼等是不快に思うからです。なぜなら、結論的に言えば、ヨーロッパの文明は終わったということなのです。丁

度アテネの街路をトルコの兵隊が行進するさまをアテネの市民が眺めているようなものです。それは、ベートーベンのトルコ・マーチから思い出されたのです。アテネの街から眺められるアクロポリスの丘には、すばらしい大理石の神殿が南国の太陽に輝いているが、今その街路は、かつて自分達が征服した異国のその国の兵隊がこを彼等自身の国のような顔をして行進している。文明は移って行くものなのだ、ヨーロッパは過去のものになりつつある。実を言うとヨーロッパ人は特にベルギー人そしてフランス人も、あるいはドイツ人もそうであるが、アメリカに対してある劣等感を持っています。それは軍事的にというだけでなく、経済的にもそして生活様式についてもそうです。しかし、それは多くの場合逆の形で表現されています。事実、あるとき私が研究室の友人の家に行った時、彼の台所には皿洗機（アメリカ製）が置いてあって、それは洗滌も乾燥もスイッチ一つでできるのです。彼はそれを見せつけて嬉しそうな顔をしてその機能を説明してくれました。それに反して、私の下宿の便所は水洗ではなく汲取り式なのです。また、レーディオ・ルクセン

ブルグは毎日全ヨーロッパに向け、アメリカのジャズを放送していて、何れのカフェでもそれを聞くことができます。私はジョンの質問に答えて、日本でも米国のために、古い習慣が失なわれ、青少年はジャズに踊り回っていることと答えた。その時彼は日本はまだアメリカに占領されているのだからなあといってくれた。

さて、ジョンの話の中で私が日本人として最も強く感じたのは、ヨーロッパの親達がどのような気持で子供を愛しているかということであった。彼の言葉によると昔のヨーロッパの親達は子供を愛するのに、無茶苦茶な愛し方をしないで、子供が大きくなった時に社会に出て立派な生活ができるように愛し、躾をしてきた。これは永い社会生活の間に、彼等が身にしみて知った愛情である。それが戦後に混乱したのだ。今の親達は子供を野放しにしている。丁度ジャングルに放たれた野獣のように子供達は成長して、自分自身を律することができず、オートバイで音をたてて暴走したり、メスで他人を傷つけたりする。昔の親達は子供の躾はとても厳重にし、鞭で子供の尻を打つのは日常の茶飯事のことだっ

た。しかし、今それをすると、親が暴力を振ったといつて攻撃される世の中になっている。私は彼の話聞きながら日本のことを思い浮べた。日本の母親達は子供に対する愛情を何にか感違いしているのではないか、赤ん坊の時から、赤ん坊が泣けばお乳をあたえ、子供になれば、泣けばお菓子やお玩具をあたえる。それは子供の願うことをなんでもかなえてやるのが親の愛情だと思っているからである。これはある意味で美しい習慣かも知れない。しかし、子供の方から見ると、自分が我儘を言えばすべてその通りになるということを条件反射的に教えられていることになる。それが現代の青少年の無軌道の原因になっているのではなからうか。これは昔の道德を教えるも無駄で、現在の親達に真の意味の子供に対する愛情を教えなければならぬ。それは子供が大きくなって本当に正しい社会生活をするように、赤ん坊の時から泣いたらといって直ぐに食物を与えないようにしなくてはならない。それが本当の意味の子供に対する愛情なのである。私はジョンと話をしながらそれを感じたのである。（工学部教授、生物学）



留学記

松本仁助

最近久しぶりにドイツのマインツからK嬢の手紙を受け取りました。K嬢の便りは、ただ久瀾を述べ、日本の切手を送って頂ければ有難い、という簡単なものでした。だが僕にとっては、彼女は留学中の忘れられぬ人の一人なのです。というのは彼女は、僕がドイツで最初に個人的な話をした人だからです。彼女との出会いの場所はマインツの大学病院でした。こういったすと、読者は、「なんだ松本は、ドイツに着くなり入院したのか」と思われるでしょうが、彼女との出会いにはつきのような事情があるのです。

僕がマインツ大学から一九五九年度の留学

許可の通知を受け取ったのが、むこうの大学の新学期にあまり間もない頃でした。そのためドイツへ出発するまでは、家族とゆっくり話をする機会もないぐらい準備におわれ、四月二十六日羽田に着いたときには、よくまああったものだという思いだけで一杯でした。「ところが、僕はそれまで旅行らしい旅行をしたことがなく、同社社の入試で地方試験場に出張しても、すぐ家が恋しくなるぐらいでしたから、羽田で家族と別れて構内に入り、沢山の外人客のなかに混じってしまおうと、まるで外国にいるような気持ちになり、たちまちホームシックにとりつかれてしまいました。だが飛行機が予定通りに飛んでいたら、その間に気持の整理もでき、落着きも取りもどせただろうと思います。ところが僕の乗ったオランダ航空(KLM)の飛行機は、ボロ飛行機の上、東京を出て二時間ほどすると風にあい、マニラ近くでとうとうエンジンの一つが止まってしまいました。そのため着陸地点に何時間もエンジン整備で待たされるはめになりました。いまから思えば、ドイツへ着くまではどうともならないのですから、その間ゆっくり旅を楽しめばよかったです。が

そのときは、ドイツでは休日どおり来ないのでおこっているのではないかと気にしたり、故障のあげく墜落するんではないかと心配したりで、とにかくはじめての長旅に不安が先だち、旅の途中はほとんど眠れませんでした。こんな状態でフランクフルトに着いたのが、五日目の午前二時。すぐにKLMの世話で、ホテル「フランクフルターホーフ」に泊まりました。しかし案内された部屋に入ってみますと、宿泊費、一泊四十五マルクという値段表が壁に張られています。僕は飛び上って驚きました。こんな出費をしては、奨学金を貰うまでの生活ができません。朝できるだけ早くでると、四時間ほどしかいないのだから、交渉次第で半額にはなるだろうと、情けないことを考えながら、そのときも一睡もせず夜明を待ちました。メイド達が仕事を始めるのを待ちかねて、会計へいくと、「KLMがあなたの宿泊費をもつことになっています」といわれ、勢い込んだ僕はがっくり。しかし今更「それではもう一眠りします」ともいえません。すぐマインツへいくことにし、食堂で甘いコーヒを二杯たてつづけに飲んだだけで、チップもやらず、妙な顔をするボーイを

横目でららみつけてホテルをでました。

このように心配をしつづけて、やっとの思いで大学にたどりつき、とにかくゆっくり一眠りしたいと思いながら、「外国人留学生課」に出頭しました。すると「あなたの主任教授のM先生が二日前から、あなたが到着したかとしきりに問い合せていられるから、いまずぐ先生に会って下さい。しかしM先生は、四月初から大病院に入院していられるから、そちらへいって下さい」という話です。そこでまた、まだ東も西もわからないマインツのなかを、事務員の書いてくれた地図をたよりに、かなり遠い大病院へ足をひきずっていききました。

病院の受付で、M先生の病室を尋ね、広い構内をさまよった末、その病室を見つけたときには、精も根もつきはて、その上早口のドイツ語に面喰っていましたので、M先生と話す気力もなく、どこかでゆっくり寝るだけ寝て、そのまま日本へ帰ってしまいたい気持ちになっていました。

そのとき病室のドアが開いて看護婦さんがでてきました。僕の顔をみるなり「松本さんですわ。さっき大学から電話がありました。

先生もお待ちかねでしたが、いま注射されたばかりで安静にしておられねばなりません。その間すみませんが待っていてただけませんか」といって、僕を休憩所に案内しようとしてました。この人がK嬢です。見るからに親切そうな彼女に、僕は思いきつていままでの事情を話し、しばらく横にならしてもらえないかと頼んでみました。彼女はいたく同情してくれ、早速空いている病室に寝られるよう取りはからい、「M先生には言っておきますから起しにくるまでゆっくり休みなさい」といつてくれました。

K嬢が起しに来たときは、六時過ぎで、七時間位眠ったようです。彼は、「M先生も『眼が覚めるまで休ませてあげなさい』といわれましたが、もう夕食の時刻です。食事してから先生に会われるのがいいでしょう。わたしも今晩は非番ですから一緒に食事しましょう」といって食事に案内してくれました。

食事のとき、「KLMのステュアデスが不親切だったのは、オランダの対日感情によるのだろう」とか、「フランクフルトのホテルで夜中にトランクを動かしていたら、メイドに静かにしろと叱られた」などと、僕のまだ

ゆっくりとしか話せないドイツ語で話す話に、彼女は相槌をうつたり、笑ったりしていました。が、コーヒを飲むときになると、「わたしはいま神経科につとめています。M先生は、部長の激務のため神経を疲労させられたのです。しかしもうよくなっています。だがこの神経科には、かなりの外国人留学生が入院しています。みなノイローゼです。その原因はコンプレックスにあります。だからあなたもドイツ人を怖れず、自分の思うことを出来るだけ率直にいわれることです。また仕事の計画もなるべく小さなものにされるのがよいでしょう」と真剣な顔でいつてくれました。その後留学生生活を続けるうちに、何度僕は彼女のこの忠告を有難いと思ったか知りません。

マインツの象徴のドームを指しながら、「あれがドームです。今晩はあの近くへ映画を見にいきます。Guten Enioht bei Profes sor M. (M教授のところではうまくやりなさいよ)」といった彼女のいたずらっぽい顔を思い浮かべながら、僕はいま彼女におくる切手をせつせとあつめています。

(文学部助教、ギリシャ語)